

柳田邦男さん

インタビュー・構成／会報編集・郡司 武
写真／水村 孝



「さよならのない別れ」を どう生き直すのか

コロナ禍のなか、ある日突然訪れる「さよならのない別れ」。

人生の物語が突然切断されるこうした死は、

災害でも事故でも起こりうる。

さよならの言えない「特異な別れ」を、

人は、どう受け止め、どう生き直したらいいのか。

死を考察してきた当代一のノンフィクション作家・

柳田邦男さんが語り尽くします。

だ、と思ったんです。

この世で生きた人の死の尊厳は命の尊厳、何物にも代えられない大事なものののに、それがコロナ禍の中で突然破壊されるということが起こっている。

――長年、死について考察されてきた柳田さんが、コロナ禍による

死は尋常な死ではない、と直感されたわけですね。

柳田 これまで、がんでの死など

に向き合ってきましたが、これはじわじわと近づいてくる死でした。本人も家族も、あらかじめ考えながら「その時」を迎える。緩和ケアを受けながら安らかな死を迎える。しかしコロナでの死は全く様相が違う。コロナ死の特異性というのは、予想もしないなか突然に訪れるということ。そしてすぐに専門病棟に隔絶されてしまう。面会も付き添いもできない、看取りさえもできない、別れの言葉もか

けられない、お互いにさよならのメッセージも交換できない、納体袋というあのビニール袋に包まれて霊安室に運ばれ、火葬場での別れもできない、そういう状況なんですね、初期の頃は。今はスマホやタブレットを使って連絡できるようなにはなりましたが…。

――少しは変わってきているようですが、手を取り合つてとか頬を撫でるとかはできないですよね。

柳田 欧米でもそうでした。イタリアでも医療崩壊が起こり、病院で亡くなるとロッカーの中に遺骨が入れられて、それが「再会する」最初の場であつて、そのロッカーに泣きすがつている女性の映像をテレビで見ました。要するに、コロナでは、人間のコミュニケーションの基本である「対面」や「接触」が規制されてしまう。きわめて特異なことなんですね。

柳田さんはこの春、コロナ禍の中の「特異な別れ」をテーマとした「さよならのない別れ」というタイトルの本を出版されます。今日は、コロナに限らず、さよならも言えない突然の死なども含めた、さまざまな別れ、そこから人はどう立ち直っていくのか、などについてお伺いします。

れ、メディアに囲まれて「コロナで急入院し、最期の別れもできなかった」と言葉少なに語ったんですね。「霊安室で棺に納める時も火葬場でも立ち会えなかった」と。その無念の思いが表情から伝わってきました。それを見て、はっと気づかされたんです。人間にとって、人生の最期、この世での最期に、大事な家族や愛する人たちと別れの言葉を交わすことができない、象徴的に言えば、さよならと言えない…。そういう別れが突然、日常の中に降って湧いたように起こる。これは大変な問題

――柳田さんは以前から、「人は物語を生きている」と言われています。そして、「その物語の最終章は自分で書く」ことを勧めています。つまり、最後は意志的に生

柳田 直接的には、2020年の3月末に、喜劇役者の志村けんさんが亡くなられたことです。遺骨を抱いてお兄さまが自宅に帰ら

が突然、日常の中に降って湧いたように起こる。これは大変な問題

会も付き添いもできない、看取りさえもできない、別れの言葉もか

『棺に納める時も立ち会えなかった』と、

志村けんさんのお兄さまが言葉少なに…

き抜くということの重要性を説いているわけですが、「コロナは、その人それぞれの物語を突如として断ち切ってしまうということになるわけですね。」

柳田 「物語」を破壊するものとして最悪なものは戦争ですね。それから災害、思いがけない不慮の事故。災害でもないのに、これと同じようなことが起こったのがコロナなんです。まったくある日突然、胸が苦しくなって検診を受けたら感染が分かり、病棟に隔離され、ビニール袋に入れられたまま火葬されてしまう。家族や愛する人のもとに帰ってくるのは灰になってから…。「最終章を自分で書けない」ということは人間の尊厳が損なわれるということですよ。

『「あいまいな喪失」への対応が問われています』

——物語が切断される死、と言えば、1985年の日航機事故もそうでしたよね。一瞬で520人が亡くなりました。東日本大震災もそうでした。具体的な例をあげてお話しただけですか。

柳田 2011年の東日本大震災の場合は、2万人近い方が亡くなったり、行方不明になったり、行方不明者は生きているのかどうかかわからない。記憶喪失でどこかの施設で生きているかもしれないとかいろいろな思いが交錯します。いわゆる「あいまいな喪失」です。「さよならの言えない死」と「あいまいな喪失」は重なりますね。例えば宮城県北上川河口近くの大川小学校の場合、74人もの児童と10人の先生方が亡くなりました。

その中に、いまだに行方不明の方が一人おられる。私が訪れた2020年の春、そのお父さんが、小型のシヨベルカーで学校近くの土地を掘り返していました。10年経つても心の整理がつかないんですね。「息子の死」を受容できない。また、大切な家族を亡くした人たちは、亡き人がほーっと海岸に立ち現れる夢をみるというんです。



柳田 経験がないというより、医学的

に経験がないからですね。

柳田 経験がないというより、医学的論理では、説明がつかない、そういう精神世界に対応できないんです。宗教家の力を借りなければならぬということ、いろいろなところで今、医療と宗教が手を結んだ活動が広まっています。それは後に、東北大学の大学院に「臨床宗教学」という寄付講座が開かれることにつながっていきました。

——その活動には、日本尊厳死協会の東北支部も関わっています。

柳田 そうですね。「死の形」と

亡としても、亡くなった方はあなたの心の中に生きているんだから…、それまでも切り捨てるわけではないのですよ…」というようになことを伝え続けていくことなんです。

これは当事者にしてみれば時間がかかることです。よく「時は最良の薬」だと言われますが、これはカウンセリングやサポートする人が押し付けてはいけません。——待つていなければならぬ。

『きつと、けんちゃんの手を握って安心させてあげたいと思いますよ』の言葉が心を溶かし…』



柳田 そう。本人も支える人もともに待つ話なんです。上からまるで理論の枠組みみたいにして押し付けてはいけません。その時がいつ来るか、人によって違いますから。1985年の日航機事故のご遺族のことですが、9歳のけんちゃんというお子さんを亡くされた美谷島邦子さんは、「甲子園野球を見に行きたい」という野球好きの息子の夢を叶えてあげようと一人旅をさせました。母親としては「な

んで付き添ってあげなかったのか」を悔やみ、羽田空港で見送りはしたけど、ほんとの意味の「さよならのない別れ」にやり場のない喪失感に襲われたのです。美谷島さんは、遺族会の事務局長として、最初の頃は事故原因の追及や告発に全力を注ぎましたが、解決できない問題がありました。それは、心の中にある「喪失感」、子どもに対する罪責感だったんです。そんなころ、1本の電話が入ったんです。日本航空は事故機の座席表をご遺族に渡していましたが、けんちゃんの隣に若い女性が座っ

いうのは、残された人にも大変な問題を残していく。そういう中で「さよならのない別れ」や「あいまいな喪失」に、専門家や社会がどう対応していくのか、今、問われています。生と死の問題が新しい段階にきていると感じます。

——専門家や社会もそうでしょうか、結局は、一人ひとりの胸にストンと落ちていくようにならないとダメでしょうね。

柳田 そういうことです。

——どうすれば、あるいはどういう経緯で、ストンと胸に落ちていくんでしょうか。

柳田 一般論としては言えないんですが、「あいまいな喪失」に取り組んでいるカウンセラーたちが大事にしているのは、「死んでいくのか生きているのか」どちらかわからない場合、強いて分けられないで、「あいまいな」状態をそのまま受け入れていくことをサポートすることなんです。行政や警察、保険会社などが死を認めるのを迫るのはやむをえないことです。しかし大事なことは、「書類上は死

ていたんです。その方のお母さんはお寺のご住職の奥さんで、電話してきて、「うちの娘は子どもが好きでやさしかったから、きつとけんちゃんの手を握って、しっかりと安心させてあげたいと思いますよ」と言うんですね。その言葉が、心がくしゃくしゃになってしまっていた美谷島さんの心を溶かし、心を整理するきっかけになったんですね。

——なるほど。胸に迫りますね。

柳田 ちょうど同じ時期に、ぜんぜん付き合ひのなかった新潟のけんちゃんと同じ小学3年生の子どもたちから、ジュースが送られてきたんです。「山に持って行ってけんちゃんに飲ませて」と。そういうことがいくつもあり、少しずつ少しずつ、支えられていったんですね。美谷島さんは事故から1年ほどのちに詩人・高田敏子さんの文化講座に通い始めました。これは重要な意味を持ちました。詩を習いだし、御巢鷹山に行く、けんちゃんへの溢れる思いが言葉となって佛々と出てくるんです。

心の奥にたまっていたカオス状態の鬱々とした思いが吐き出されるように。

——慰霊の山・御巢鷹山に登ることに言葉がほとぼり出てくるわけですね。

柳田 歳月を経て、あるきっかけで、けんちゃんは行方不明になったのではなく、自分の中にあると気付くんです。「ぼくはここにいるよ。どこにも行かないよ!」という言葉が聞こえてくる。これは、人が「喪失」から立ち直っていくうえで決定的なくらい重要な意味を持つんですね。精神性の命を見出していく作業——これが癒しの本質的なことであり、混とんとしてどう生きていけばわからないような中から抜け出していく大事な節目になるんですね。

『しかたなかんべさ』と母は運命を受け入れ

——レジリエンス、つまり生き直すということですね。個人的なことをお聞きしますが、柳田さんも25歳の息子さんを、自死という形

で亡くされました。どう立ち直られたんですか。

柳田 自分自身が再生する力というの、自分自身が生まれ育った中で染み込んだものではないかと思うんです。それが核になる。特に親がどういう局面の中でどう生きたのか、どう気持ちを切り替えていったのか、それを見つつ形成されていくと思います。私についていえば、母親です。私が10歳の時に父が亡くなりました。その半年前に兄が亡くなってました。終戦直後の結核最盛期で、母は40歳でした。子どもも多く、私が一番下でした。それでもパニックにもならず鬱にもならず。栃木県の方言で「なんとかなるべさ」とか「しかたなかんべさ」というんです。これは、運命とか宿命というのは逆らえがたい面があるから、ジタバタしても仕方ないということなんです。ジタバタすれば、かえって負を背負ってしまう。運命を受け入れる。これが「しかたなかんべさ」なんです。決して放棄することではない。ありのままを受け

う」という響きさえ持ったでしょう。

「そうでなければならぬならば、の意味も」

——そうですね。なるほど。その「さようなら」ですが、非常に意味の深い言葉であると、柳田さんは書かれていますね。

柳田 この語意は「さようであるならば」なんです。もう一つ、「そうでなければならぬならば」という意味もあるんです。どういうことかという、さよならと違って人が別れる。いろんな別れがありますが、これまでの人生と何らかの理由で別れ、次の新しい人生



『いろいろな声の到達点として』「さよなら」という声が聞こえたと言っていますね

入れて、自分と家族の将来に対してきちんと向き合う。まさにレジリエンスそのものなんです。

柳田少年には、その時の母の姿が染みついたんですね。

柳田 私の場合、次男が25歳で亡くなったショックは大きかったし、今でも引きずっているものがたくさんありますが、母の生き方が、気がつけば私の心の版型になって

いて、自分も息子の死を息子の生の文脈で受け止めて生きてきた、と言っているのかな。

——日航機事故の美谷島さんも、けんちゃんの「生の証」を糧にして生き直したわけですね。

柳田 美谷島さんは一昨年、絵本を書いたんです。「けんちゃんのモミの木」という絵本。絵は家内の伊勢英子が描きました。その中

——節目をつけて一歩踏み出すわけですね。

柳田 ですから、「さよならのないう別れ」というのは、とても辛いものなんです。であると同時に、さよならがない別れの場合、これからどうすればいいのか、どう生きていけばいいのか、今、新しい課題になってきているのです。

——うーん。今日は「さよなら」という言葉を機軸に、深いお話をいろいろいただきました。ありがとうございました。

インタビューを終えて

「死」を見つめ、考察してこられた柳田さんの言葉は、かすかな栃木なまりに乗って、胸にやさしく迫ります。次男の自死、気丈に戦後を生きる母の姿、自らの老い…そして日航機事故で9歳で亡くなった「けんちゃん」のくだりには、涙目になりました。「さよなら」は、節目の言葉。新しい人生に踏み出す接続詞」と話す姿が目に残ります。

会報編集・郡司 武



やなぎだ・くにお

1936年、栃木県生まれ。ノンフィクション作家。東大経済学部を卒業後、60年にNHKに入り、全日空羽田沖墜落事故やBOAC機空中分解事故などを取材。71年、これらの事故を追ったルポルタージュ『マッハの恐怖』で大宅壮一ノンフィクション賞。74年にNHKを退職し、以降、航空評論家として活躍。95年、次男が自死した体験を綴った『犠牲一わが息子・脳死の11日』を発表。この年、ノンフィクション・ジャンルの確立への貢献で菊池寛賞。以降、事故や災害、生と死、終末期医療など、現代における「いのちの危機」をテーマに書き続けている。著書に『空白の天気図』『がん回廊の朝』『脳治療革命の朝』など多数。